

地球環境の保全が世界的なテーマとしてクローズアップされている。それに伴って、企業のあり方にも国民の厳しい目が向けられてきており、環境に優しい企業づくりは21世紀に発展する企業の要素として欠かせないテーマとなっている。

なかでも、「水」に対する関心はここ数年の天然水の爆発的な売れ行きに見られるように、単なる一過性のブームには終わらない。環境保全における最重点課題となってきた。

地方企業にこそチャンス

このように環境問題への関心が世界的に高まるなか、水をテーマに快適な

環境づくりを提案し、発信しつづける企業がある。島根県に本拠地を構える小松電機産業がそれ。同社が1992

年に開発した集落排水計測・制御・監視システム「やくも水神」は下水処理管理システムの分野に大きな衝撃を与えた。NTTの公衆電話回線を利用することによって、従来、コストや管理の問題から設置が困難とされていた農山村の下水処理の低コスト化、かつイージーマンテナンスを可能にしたからである。

この新しいシステム「やくも水神」は浄水場、配水池、中継ポンプ場、処理場に設置する計測機器とこれらを管理する役場、および民間の管理者の電算機やパソコン端末機、さらに緊急

時用のポケットベル等で構成され、次のようなメリットがある。

①一カ所の役場で最大一五カ所の処理施設と五〇カ所の中継ポンプ場の監視が可能となる、②NTTの公衆回線を使うため専用回線に比べて簡単であり広域なネットワークの構築が可能となる、③通信手段に公衆電話回線を利用しているため、専用電話回線に比べて通信費が約半分で済む、④各処理施設の運転・計測情報を役場の監視装置で一括監視できる——等々である。

このようなメリットが評価されて、現在では、地元島根県をはじめ、鳥取、滋賀、兵庫など二一の小規模自治体で導入され、科学技術庁の発表した全国一〇〇件の注目発明にも選定された。



青山幸男の

NEW

リストラ講座

再生と発展のシナリオづくり

8

小松電機産業の理想企業づくり

目指せ地方発信の研究開発型企業 農山村の下水処理管理で大ヒット

さらに昨年には、この「やくも水神」に排水中の窒素とリン分をそれぞれ九〇%、七〇%除去する処理施設と自動制御システムをセットした「ニューやくも水神」を発表し、技術力の高さを示した。この分野ではとかく、技術力、営業力、資金力、システム構築力などに優れた大企業がシェアを握っているが、小松電機の成功は地方の中堅企業でも十分対抗できることを実証した。

ニーズを掴むノウハウ

この「やくも水神」が誕生したきっかけは、水質の悪化に悩む地域社会の要請であった。小松電機産業のある島根県は宍道湖、中海という二つの湖をかかえ、県都・松江は「水の都」と称されるほど、風光明媚な環境を誇っていた。ところが、これらはいずれも閉鎖性水域で、生活排水の増加とそれに追いつかない処理施設の設置状況によって近年急速に汚染が進み、名物のしじみやすずきの漁獲量も減る一方であった。それにもかかわらず、小規模な農山村にふさわしい下水処理施設は中央の大手企業では開発されずに、取り残されたままの状態であった。

小松電機はこうした地域に密着したニーズを正確に汲み上げて商品化した

公衆電話回線を通じて浄水場、排水池、ポンプ場などの状況がパソコンの端末で一括監視できる「やくも水神」



小松電機産業株

創立——1973年2月
本社——〒690-21 島根県八束郡八雲村東岩坂180

☎0852-54-1166

資本金——一億円
年商——三五億円(94年7月期)

従業員——八五人
事業——シートシャッター製造、集落排水制御監視システム設計製造

注目点——配電盤・自動制御盤製作技術をベースにシステム製品の開発・生産・営業ができる一貫体制



小松昭夫社長

わけだが、同社の二十数年の歴史はまさにこうしたユーザーニーズの商品化の連続であった。同社の小松昭夫社長(五〇)は島根県の松江工業高校を卒業後、地元の大手農機具メーカー、佐藤造機(現、三菱農機)に勤めていたが、このメーカーが会社更生法を申請し、事実上倒産。それをきっかけに、独立開業を目指し、大阪の企業で二年間、マネジメントのノウハウを学び、故郷に帰ってきた。松江工業高校を卒業し、大阪で会社勤務していた実弟(光雄氏、現専務)も帰郷し、73年二人で、同社の前身である小松産業を設立した。

当初は元手のいらぬポンプの修理業から始め、水道や排水、冷凍などの制御盤・配電盤へと徐々に付加価値の高い分野に手を広げてきた。その関連で水道の給水施設を自動制御する計装システム等を手掛けるようになった。「やくも水神」の開発のもとになった技術やノウハウはすでにこのころに蓄積されていたのである。小松氏は創業当初から、「相手に喜んでもらうって自分もうれしいという関係を広げていく——技術者だから物づくりによって」というコンセプトを掲げて、ユーザーニーズの吸収に努めていった。この積み重ねが80年、大ヒット商品となったシートシャッター「門番」(超

音波センサーが車の接近を感知し、瞬時に自動的にビニール製のシャッターが開閉し、防寒・防塵性に優れた装置)の開発につながり、ベンチャー企業としての評価を高めた。

現在では、シートシャッターが全売り上げの八割を占める主力商品に育っているが、「やくも水神」をはじめ制御計装システムに事業を展開しており、いずれもオリジナルな技術開発によるもの。「社業を通じて社会に喜びの輪を広げよう」という企業理念は、「社会のニーズに応えていく事業家精神」でもある。経営の発想も事業の展開も、一地方の中小企業の範囲にはとどまらない。

人づくり工場を目指す

今年、同社は宍道湖を臨む松江市郊外の「松江湖南テクノパーク」に新工場と研究所を建設する。同社ではここを単なる工場ではなく、「人づくりのためのヒューマン・ファクトリー」と位置づけ、研究所やラウンジ・ホール等を設置して、次代を担う人物・人材育成の場とする構想である。

そのため、新工場の隣に、HNS研究所の創設を計画している。HはHUMAN(人間)、NはNATURE(自

然)、SはSCIENCE(科学)をそれぞれ指し、これらの分野の研究を通して、小松氏が唱える本来あるべき姿の社会の創造、つまり多くの人生の目標を持ち、それを実現できるような夢とロマンにあふれた社会の創造を目指しているのである。

小松氏は、現在の情勢を「戦国時代に似ている。全国の戦国大名が理想の国家を構築するために戦ったように、これからは志を持った地方の研究開発型の企業が活躍する時代」と分析し、今後、企業家を目指す人たちに対して、「自分は何のために事業を行うのか」という志の必要性を訴えている。既成の価値観が崩れ、新しい価値観や新しいパラダイムが形成されつつある大転換期にある今こそ、「企業家は何のために創業するのか、事業を通じて社会にどのようなかたちで貢献していくのか」という志を持ち、創造的な企業づくりを行うことが求められる」というわけだ。地方発信の研究開発型企業——小松電機産業は地方にあっても、理想的な企業構築に向けたユニークなケースとして注目される。

あおやま・ゆきお 中堅・中小企業やニュービジネスに対する経営戦略構築 育成・指導に定評。21世紀型高度専門企業を提唱。(株)明電舎勤務を経て、現在、ソーケンマネジメント(株)社長。昭和7年生まれ。同志社大学卒業。